

情報交換の場から 広がっていくであろう 新たな可能性



(株)ドーコン交通事業本部 女性技術者の会

もっと自分を高め、
仕事において
ベストパフォーマンスを
発揮していこうと、
女性技術者たちが
ジャンルを飛び越え
会を結成しました。

自己のレベルアップに

女性技術者一人ひとりが持つ悩みや疑問、そして可能性は、女性同士互いに手をつなぐことで、より良い方向へ進んでいくのかもしれませんが。(株)ドーコン交通事業本部に所属し、「ドーコン交通事業本部 女性技術者の会」を2010年の夏に発足させた8人のメンバー。特に会の中で役職を決めたり、定期的な会合を持つといったしがらみはなく、スタートしてまだ日も浅いことから、いろいろ模索しながら一歩、一歩前に進んでいるところです。

会設立の背景について、構造部主任技師の丹波郁恵さんは「官公庁や同業者に目を向けると、土木の世界でも女性技術者が増えてきていると感じています。そこで“女性としての良い点も悪い

点も理解した上で、自分たちの観点や感性を生かし何か新しいことに取り組めれば」と考えたわけです」と話します。専門分野が違い、部署が異なると日頃からほとんど接点はなく、それぞれがどのような仕事に就いているのか知らないことも珍しくありません。その知らないままの状態から、情報交換

の場を作り、自己のレベルアップにつなげていこうと行動に移しました。

8人中、3人の女性が所属するサイクルシェアリング推進室は、社内でも異例ともいえる配属であり、右も左も男性職員という職場環境において、新風が吹き込んだとも



構造部 主任技師
アセットマネジメントBMS担当
丹波 郁恵さん
博士(工学)/技術士(建設部門)



防災保全部／交通部兼務 技師
サイクルシェアリング推進室

石川 里子さん

いえそうです。そのサイクルシェアリング推進室の技師、石川里子さんは「結婚というステップを踏み、将来は出産、子育てが待っている段階です。そうすると仕事との両立は大丈夫だろうかという、漠然とした不安があるのも事実。しかし未婚、既婚を含め皆で話し合い、相談できる場があれば、仕事でベストパフォーマンスを発揮できると思います」とコメントします。

また、同サイクルシェアリング推進室に所属する主任技師の渡邊弥生さんは出産、子育てを経験し、一時期仕事を離れ専業主婦にもなりましたが、再就職し現在に至ります。自身にとって馴染みの深い土木の世界に戻り、戸惑いや葛藤があ

りながらも、周囲の理解や協力に支えられて仕事を続けてきたという彼女の実体験は、仕事をこなしながらも、妻や母親という役割を果たしていきたいと願う他のメンバーの道しるべとなることでしょう。最近、イクメンという言葉を目にするようになり、育児休暇を取得した東京都の区長もあらわれており、これまで以上に同じ目線で相互を理解できるようになるのかもしれません。

いえそうです。そのサイクルシェアリング推進室の技師、石川里子さんは「結婚というステップを踏み、将来は出産、子育てが待っている段階です。そうすると仕事との両立は大丈夫だろうかという、漠然とした不安があ



交通部 主任技師
サイクルシェアリング推進室
渡邊 弥生さん
技術士(建設部門)/VEリーダー

生活者としての目線

前出の渡邊さんは「PTAの会合などに出席すると、例えば除雪なら親ごさんの立場からは、スクールゾーンを優先させ、見通しを良くし子どもが安全に登下校できるようにしてもらいたいという意見が出るんです」と言います。

子どもから広がる人間関係に地域住民のニー

ズが見え、母親になることで変化するライフスタイルが、仕事に対する感性を変化させていくことは当然のことです。道路作りにおいても、早さや交通量といった効率はもちろん、日々暮らしを営む女性ならではの「道路でも、子供とほっと一息つける空間があれば」であるとか「段差がなく、高齢者や障害のある方でも使いやすい歩道が必要」という考えが浮かぶのも、ごくごく自然なことです。コンクリートという無機質なものに、あたたかさや優しさを添えていけるのは、もしかすると女性ならではの、なせるわざなのかもしれません。

イベントへの参加で手応え

これまでの会の実績としては、2010年秋、市民にもっと土木のことを理解してもらおうと新札幌で開催された、土木学会主催のイベントへの参加があります。一般の来場者に向け、親しみやすいようクイズラリーを行うなどし、女性がニコニコと笑顔で説明することで、雰囲気もやわらかいものに。子どもたちは「そういうことか!面白いね」と、土木に対し興味を示し、手応えを感じたそうです。何よりも、土木における社会基盤の整備は一般市民のためであり、女性のソフトな力を持って市民と施工する側の距離感を縮めていけるよう知恵を出し合えば、無用な誤解も解決していくはずです。

作り手はどんどん作り、実際に使う市民は遠目から「何か作っているようだ」と、どこか人ごとでは残念です。「生じているギャップを放置しておきたくはないですね。土木を

身近に感じていただけるよう、会を通していろいろ仕掛けていければ」。そんな意見が、構造部主任技師の吉川直子さんからでした。

道路であれ、橋であれ、それができると、市民生活がどれだけ便



構造部
主任技師
吉川 直子さん
防災士

利に、快適に、あるいは安心、安全になるのかというのを、正しく伝えていきたいというのは、サイ



交通部 技師
サイクルシェアリング推進室

山本 純江さん

また、家族や友人であっても「ツルハシやトンカチを持つような仕事をしているようだ、ぐらいの認識で」と苦笑する防災保全部技師のマリクアワン秀美さん。現場でさえも工事関係者に不思議がられるケースもあります。土木をより身近に感じ、正しく理解してもらうことで女性技術者の存在も認

クルシェアリング推進室技師の山本純江さんも同意見です。専門的に偏った情報発信ではなく、女性だからこそできることは、たくさんありそうです。

また、家族や友人であっても「ツルハシやトンカ

識してもらえるような道筋をつけていきたいとも。

石川さんやマリクアワンさんの「わたしたちは、会のメンバーの仕事を通じて、防災や構造、マネジメントなどさまざまな分野に触れ、その得られた



防災保全部
技師

マリクアワン秀美さん

情報を各自業務に反映していけると考えています。女性向けのセミナーや勉強会を開催するなど、これからも前進し、より実り多い会に発展させていきたいですね」という言葉に、一同大きくうなずいていました。

▼受付周辺の様子



▲開会の様子



▼ぬりえ図書コーナー



▼イベント会場(サンピアザ)



歩測体験



模型体験